第２章　東アジア宗教研究からみた天草

二階堂　善　弘

１．フィールドとしての天草

ある文化が他地域に流入した場合、それが変容するのか、融合していくのか、孤立したものとして定着するのか、或いは衝突が起こるのか、そのような多種多様な現象について観察を行うことは、非常に興味深いことである。筆者等が試みている文化交渉学の方法論においては、特にそうだと言える。

たとえば、いくつかの宗教文化が融合したり反発したりする現象は、アジア各地域で観察することができる。キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教、道教といった多様な宗教文化が融合し変容する様子は、特にシンガポール・マカオ・香港などの地に顕著に現れている。そういった意味でこれらの地域は、文化交渉学において格好のフィールド調査の場と言える。

ひるがえって日本における宗教文化の交渉の事例を見ると、古来より仏教と儒教の伝来があり、神道や民間信仰に影響を及ぼし、融合や反発といった現象が起こっている。これは日本の各所において見いだせる。ただ、道教やキリスト教等、その他の宗教との交流の事例については、意外なほどそれが見られる地は少ないのである。

天草という地は、日本においてキリスト教の受容が行われ、それに対する政治的な干渉と強力な反発があったことで知られる。またキリスト教禁令の後においては、仏教や神道の意図的な流入と、その後の変容などが如実に観察できる所でもある。そういった意味では、文化交渉学のフィールド調査の場として非常に適している所であると考えられる。筆者は関西大学文化交渉学研究拠点が主催した天草フィールド調査に初めて参加し、いくつかの知見を得た。簡単であるが、東アジア宗教研究から注意した数カ所について紹介してみたい。

２．サンタマリア館

有明町大浦にあるサンタマリア館においては、150点に及ぶキリシタン関連の神像などが展示されている[1)]。圧倒的なのは、おびただしい数のマリア観音像で、これだけの数を一挙に見ることができるのは他にない特色である。

むろんマリア観音とは、よく知られているように、子を抱いた観音菩薩の像を、キリストを抱く聖母マリア像に見立てて礼拝するものである。

1）http://www.museum.pref.kumamoto.jp/link/museum/south/santamaria.html のサンタマリア館の紹介による。

写真１　マリア観音像（サンタマリア館）

その像は、中国で慈母観音像として造られ輸入されたもの、またそれに類したものであるとされる。これについて筆者はやや疑問に思っていた点があった。確かに慈母観音は聖母マリアに見立てるにふさわしい。ただ、観音の像の中では慈母観音というのはそれほどポピュラーなものではない。むしろ子を抱いた像は催生娘娘・子孫娘娘など、他の宗派で見ることが多い。何か他の仏教系や道教系の神も、単純にマリア観音であるとして扱われていないのだろうか。

サンタマリア館で多くの像を見ているうちに、疑問のいくつかは氷解した。たとえば、吉祥天像を使ったマリア観音（或いはマリア吉祥天と呼ぶべきか）が存在したし、また子孫娘娘かあるいは同系統の神像とおぼしき像も見かけたからである。恐らく、いくつかの他宗派の像が実際には混在しているものと推察される。

３．明徳寺

本渡町に存在する曹洞宗の寺院である明徳寺は、天草・島原の乱後に建てられたものであり、キリシタン禁令の影響が顕著に見られる寺院である。

写真２　明徳寺山門

乱後に天草が天領となった時は、初代代官鈴木重成と、その兄で禅僧であった鈴木正三の尽力により、神社仏閣の復興が盛んに行われた。かつてキリスト教布教の中心であった南蛮寺の跡地には正覚寺が建てられ、また東向寺、明徳寺などが建立された[2)]。

明徳寺は瑠璃光寺の中華珪法禅師を招いて創建された寺院である。この山門の対聯には「耶蘇邪宗」という文字が残っており、もってそのキリシタンに対する姿勢が読み取れる。

写真３　明徳寺の石段

さらにこの山門に登っていく石段には、あちこちに十字架が刻みつけられている。つまり、この寺に入る者は十字架を踏みつけて行く必要があった。

一方でこの寺の前には「異人地蔵」と呼ばれる立像がある。

確かに、この地蔵像は西洋人のような顔立ちをしている。キリシタンを邪宗と断ずる一方で、何故このような地蔵像が造られたのか、疑問に感じられる所である。

この他の寺院や神社なども訪れてみたが、いずれにせよ、天草・島原の乱の前後で極端ともいえるほどの宗派・人物の入れ替わりが起きている。こういった動向を踏まえて調査を行うことによって、他地域には見られない現象が調査できると考える。

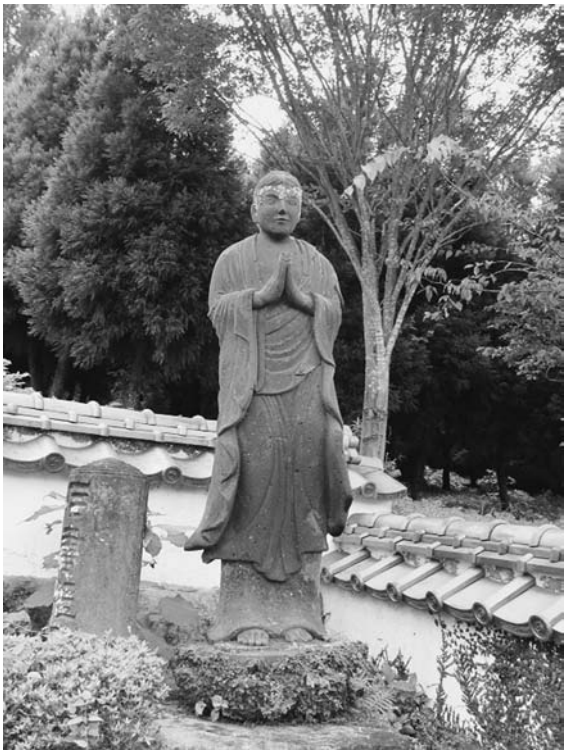

写真４　異人地蔵

2）天草市サイト（http://www.city.amakusa.kumamoto.jp/）などからの情報による。また http://www.geocities.jp/amakusa_tanken/39_myoutokuzi.htm の内容も参照。